

【生活綴方の源流の源泉】 第26回

生活綴方は、書くこと（綴方）を生きること（生活）とつなげる実践の一つであり、今日の生活教育実践にも、作文、発表会原稿、学級通信、実践記録、卒業論文など広汎に影響を与えている。書き言葉で、〈いま・ここ〉にいない人とコミュニケーションできるため、〈文化〉が生まれる。また、個人のなかで考えることにも使える。筆順や字形がめちやくちやでも、その人さえわかっていれば思考に使える。

生活綴方の源流は定説として、大正期の声田恵之助「自由選題綴方」と鈴木三重吉『赤い鳥』に求められるが、さらにその源泉として明治期にさかのぼると、軍隊における「日記・日誌・所感」の可能性がある（c/e第20回）。これは、軍隊化のすすんだ師範学校だけでなく、教員が徴兵された時の兵営での経験を通して、体罰や暴力、しごき、いじめなどとともに学校教育に流れ込んだと考えられる。「本音」を強制的に書かされる部分が〈自



己表現〕になるには長い時間がかかった。

もう一つの源泉は、「新体詩」だと仮説を立てたい。新体詩は、自由民権思想の表現を担ったり、軍歌を生んだりと多様な展開を見せつつ、近代の抒情として〈内なる私〉の表現となっていく（文献①146

頁）。文学教材は「他学科の事項を学ぶのではなく」、「趣味ある」教材による『品性の陶冶』に主眼が置かれ、た、独自の「国語」科を成立させるまでになる（189頁）。これが「改正小学校令」（明治33年）であり、沢柳政太郎が主導した。また新体詩が軍歌や唱歌と連動することは、生活綴方を書き言葉だけに限定して考えない広い視点を提供する（文献②）。（研究部・加藤聡一）

参考文献

- ① 山本康治『明治詩の成立と展開 学校教育との関わりから』つじ書房、2012年。
- ② ルソー（増田真記）『言語起源論 旋律と音楽的模倣について』（岩波文庫）岩波書店、2016年、特に24、90頁参照。